

高齢者における下部腸管出血

Lower Intestinal Bleeding in the Elderly: S. J. Boley, A. D. Biase, L. J. Brandt, R. J. Sammartano (American Journal of Surgery 137: 57~63, 1979)

1960年 Margulis が、大出血をおこした69歳の女性で、手術的血管造影で“Vascular malformation”(血管上の奇型)をみつけている。そこで著者らは、高齢者で、盲腸のVascular ectasia または Angiodysplasia が、下部消化管出血の重要な原因であると述べている。65歳以上の人での下部消化管大出血を100例経験したが、その中に結腸憩室によるもの43例、それに次いでVascular ectasia が20例あった。その診断根拠は、血管造影で右側結腸に病変を証明した。出血の再発は、憩室症よ

り ectasia の方が多かった。治療は、Vascular ectasia では、自然止血はわずか2例で、一方、憩室症の31人が自然止血をみている。血管造影時にEpinephrineやVasopressinの注入が時に成果をあげる。憩室の11例とectasiaの18例で手術が行われた。憩室では、血管造影で出血部位を確認して部分切除をすれば、再発はない。ectasiaでは、16人が右半結腸切除術を受けた。

Vascular ectasia は、年齢に関連した退行性病変で、直接原因は、粘膜下血管が特に筋層を貫ぬくところで、局所的な閉塞機転がくりかえされ、細動脈—毛細血管—細静脈単位での血液の逆流状態がつくり出される。そして小さな動静脈吻合が出来上がる。出血はしばしば多発し、20例中16例(80%)が3~7回の出血をおこしている。憩室例での3回以

上の出血は、43例中13例(30%)にみられた。大出血の可能性は、憩室の方に多く、緊急手術が、憩室の6例で、またectasiaの2例で行われた。血管造影は、高齢者の下部消化管出血の診断および治療に役立つ。約65%に成功している。血管造影で診断して切除した場合と盲目的切除の場合では、再出血はそれぞれ20例中2例と5例中3例であった。憩室による出血の再出血は少ない。動脈性出血が一旦とまると、血管内での血栓形成をおこし出血しにくくしている。血管造影で診断されたVascular ectasiaの患者での右半結腸切除は、左側結腸に憩室のある場合でも、80~90%に成功している。急性の出血がコントロールされれば、定期的に手術を行う。

(愛知県がんセンター第1内科

小林世美 抄)

逆流性食道炎における食物過敏症

Food Sensitivity in Reflux Esophagitis: S. F. Price, K. W. Smithson, D. O. Castell (Gastroenterology 75: 240-243, 1978)

症状のある食道炎の患者は、しばしば胸やけとある種の食物、例えばシトロンジュース、香料添加食品、コーヒー、チョコレート、脂肪食品らの摂取との間に関連を示す。食物と胸やけの関連は、それらの下部食道括約筋(LES)に対する効果を測定することによって多くの研究がある。脂肪、アルコール、チョコレートらの食品が、括約筋圧を下げて酸の逆流をおこすことにより胸やけをひきおこすといわれている。

21人の患者を対象として、コーヒー、オレンジジュース、トマトジュースと0.1規定塩酸の投与実験を行

った。うち5人は塩酸注入試験陰性であった。同時に他の3つに対しては不感性的であった。16人は酸試験陽性で、うち15人は、オレンジジュース、トマトジュースに感受性あり、13人がコーヒーに対して感受性を示した。おこる痛みの性質は、塩酸と他の3つのものとの間に違いを見出しえなかった。

特定の食物の摂取で症状のおこることは、特に逆流性食道炎では認められている。下部食道括約筋圧の低下した患者は、対照よりも多くの食物に対して不耐性である。胸やけをおこす多くの食品、エタノール、はっか、脂肪などは、括約筋圧を下げ、その結果として酸性胃内容の逆流が、痛みの原因になると考えられてきた。この研究で扱われたオレンジジュースとトマト製品は、括約筋圧を下げるという証拠はえられなかった。これらの食品は、酸や胆汁と

同様に食道粘膜への直接刺激で胸やけをおこすのではないかと考えられた。これら3つの食品は、塩酸テスト陽性の患者の下部食道に注入された時に痛みをおこした。これは酸による痛みと区別がつかなかった。オレンジジュースとトマトジュースは、大多数の患者で症状をおこした。これらのデータは、通常の食品は、その温度、酸度そして括約筋圧に関係なく、非特異的過程により食道痛をひきおこしうとの見解を支持している。食道炎の臨床症状を有する患者は、こうした関連を知っていると思うけれども、念のため刺激性の食物摂取をさけるように忠告されるべきである。治療は、非刺激性の液体で食道を洗うことが最良の方法である。

(愛知県がんセンター第1内科

小林世美 抄)